

# ミルチャ・エリアーデと日本の民俗学・民族学

Mircea Eliade and Japanese Studies of Folklore and Ethnology

三浦 啓二

MIURA Keiji

## 要 旨

ルーマニア出身の宗教学者ミルチャ・エリアーデは、小説家や神話学者としても知られているが、ルーマニアやバルカンのフォークロアに関心を持った民俗学者であったことは、故国を除き、よく認識されていないので、エリアーデの民俗学研究の重要性を明らかにしたい。

エリアーデは、フォークロア研究は文化の様式やシンボルの解明に資すると認識したが、その背景には、3年間のインド滞在経験や兩大戦間期のルーマニア人の宗教性とアイデンティティーをめぐる知識人の論争があった。エリアーデのフォークロア研究は、建築をめぐる人柱伝説である「マノーレ親方伝説」のバラッドおよび羊飼いの謀殺と死を結婚に擬する儀礼をめぐる口承叙事詩「ミオリツァ」の研究に集約される。

「マノーレ親方伝説」研究では、伝説の宗教的神話的意味を究明し、人柱となった妻の「犠牲としての死」と建築現場から飛び降りた親方の「非業の死」を、宇宙創造神話における巨人の創造のための犠牲としての死を反復したものであり、「創造性ある死」であるとの解釈を提示した。また、「ミオリツァ」研究では、羊飼いの死は、死を前にした諦念を表しているとの伝統的解釈を避け、叙事詩に歌われる「神秘的結婚」は、自分の運命を変えたいとする羊飼いの意思を表しており、強大な周りの民族の侵入の恐怖に晒されたルーマニア人は、羊飼いの運命を自己の運命に重ね合わせていると解釈している。

日本の民俗学、民族学との関係については、呪術的植物である「マンドレーク」の伝説研究と、日本の靈魂観に関心を示した著作『永遠回帰の神話』を取り上げる。

エリアーデは、「マンドレーク伝説」研究で、植物学、民俗学者南方熊楠が、1880年代に英国の雑誌『ネイチャー』において、欧州のマンドレークに関する民俗が、近東、アラブ世界を通じて中国にまで伝播したことを最初に論証したとその先駆的研究を高く評価した。

『永遠回帰の神話』では、民族学者岡正雄の論文『古日本の文化層』を間接的ではあるが参照し、日本の男性秘密結社、来訪者、新年の儀礼につき論じ、特に「タマ」等の日本人の靈魂観に強い関心を示しているが、岡論文の論拠の一つとなった柳田國男や折口信夫の業績には直接触れておらず、その研究は時代的制約を蒙っていたものと思われる。

【キーワード】 エリアーデ、フォークロア、口承叙事詩、南方熊楠、岡正雄

## 目 次

- I はじめに
- II エリアーデのフォークロア研究
  - 1 エリアーデのフォークロア認識
  - 2 フォークロア研究の背景
  - 3 主要フォークロア研究
- III エリアーデと日本の民俗学・民族学
  - 1 マンドレーク伝説研究
  - 2 『永遠回帰の神話』
- IV おわりに

### I はじめに

ルーマニア出身のミルチャ・エリアーデ（1907-1986）は、宗教学者として著名であるが、小説やエッセイを書いた文学者であり、世界各地の神話に関心を示した神話学者でもある。

エリアーデに関する研究は、エリアーデのこうした多様な側面を明らかにしているが、エリアーデが、生涯にわたり、ルーマニアおよび南東ヨーロッパを中心としたフォークロアに強い関心を持って研究した民俗学者であることについては、ルーマニアを除き、あまり認識されていない<sup>1)</sup>。

本論は、IIで、エリアーデの学術研究および創作活動において民俗学研究が重要な位置を占めているとの考えに基づき、ルーマニアおよび南東ヨーロッパを中心とした民俗学に拠り、エリアーデの民俗学研究につき論じ、IIIで、日本の民俗学、民族学に拠り、エリアーデと日本の民俗学、民族学との関係、すなわち、エリアーデから見た日本の民俗学、民族学につき解明することを目的としている。

なお、本論は、エリアーデを理解するための基礎的研究であり、特に、IIIの日本との関係の研究については、筆者の知る限り、先行研究は少なく、本論は試論にならざるを得なかったので、この点につきご理解を得たい。

### II エリアーデのフォークロア研究

#### 1 エリアーデのフォークロア認識

エリアーデは、早くからフォークロア研究の重要性を認識し、民族誌や民俗的創作物が文化の様式 (style) やシンボルの解読に資するものであり、民族誌に記述された信仰や文明国におけるフォークロアは、民衆の想像の産物ではなく、具体的な事実に基づいているとの理解を示している [ELIADE 1937]<sup>2)</sup>。

また、エリアーデは、ヨーロッパがキリスト教化される過程において、生きた異教形態である民衆の宗教と神話は、キリスト教化された形で農民の伝承の中に生き残り、この宗教は農耕的構造を持ち、その起源が新石器時代まで遡るものであると述べている [ELIADE 1963a]。

更に、ルーマニア文学における民間文芸の研究において、宗教、魔術、神話、伝説等の超合理的要素を持ったものは、民衆の中に流布し「歴史」に参入すると、退化の過程をたどると説き、その例として、神話から伝説が発生し、伝説が民衆のなかに「生きて」いくと、伝説のもつ想像的な要素の核が次第に欠落して、地方的、民族的な具体的な要素に変化していくと聖なる形態の退化を指

摘している [ELIADE 1939]。

## 2 フォークロア研究の背景

エリアーデがフォークロア研究を志した背景には、基本的には、豊かなフォークロアの伝統を持ち、複雑な民族事情を抱えたルーマニアで生まれ育った経歴があるが、特に、1928年末から3年間に及んだインド滞在中の経験、および両大戦間期におけるルーマニア人のアイデンティティーと宗教性をめぐる知識人の論争が及ぼした影響を指摘したい。

### (1) インド経験

エリアーデは、イタリア・ルネッサンス哲学に関する修士論文作成のためにローマ滞在中、ダスグプタ・カルカッタ大学教授の『インド哲学史』を読み、インド哲学の研究を志し、奨学金を得てインドに滞在した。エリアーデによれば、インド滞在によって次の三つの教訓を得たと回想している [ELIADE 1982]。

第一に、インド哲学において、ウパニシャッドやヴェーダーンタの一元論ではないサーンキヤやヨーガの二元論（精神と肉体）の立場があり、人間、世界、生命が幻影ではなく、実存であるとの事実に関心を持った。タントリズムのように、人間が生を享受すると同時に、生を制御できる技法をインドが知っていることを発見した。

第二に、伝統的文化における宗教的シンボリズムの重要性を発見した。ベンガルの町において、婦人によるリンガム（男性器）崇拝を目撃し、イメージやシンボルが宗教的感動をもたらす可能性をエリアーデに示した。

第三に、インドの先住民文化において「新石器人」の文化が根づいていることを発見した。インド中部の先アリア人である原住民サンタリ族の文化に、アリア・ドラヴィダ文化より更に古い農業を基礎とする新石器文明を見出した。この文明は、誕生、死、再生のサイクルの世界観・自然観に伴う宗教と文化を基礎とする文明であり、新石器時代に根を持つ、農耕の神秘を基礎とするフォークロア的文化であるルーマニアとバルカンの民衆文化の重要性を再認識するに至った。更には、中国からポルトガルに至るユーラシア大陸における農耕文化、新石器時代の遺産によって保証された精神的、文化的一体性が存在していたことを認識した。

### (2) 両大戦間期のルーマニア知識人論争

ルーマニアは、両大戦間期に政治的社会的大変動期を迎えた。同国は、第一次世界大戦後、戦勝国として領土を拡大し、それに伴い新領土の統合問題や少数民族問題を抱える一方、大地主制度のもとで隷属状態に置かれた農民の問題の解決のため、土地改革が焦眉の課題となっていた。政治的には、支配政党である自由党を中心とする寡頭政治体制が「鉄衛団」等の右翼勢力および国王の宮廷政治勢力の挟撃にあっていた [藤嶋 2012]。

このような情勢下において、ルーマニアの知識人は、国の発展の方向、古い価値観の見直し、ルーマニア人のアイデンティティーおよび宗教性をめぐり、見解の異なるほぼ二つのグループに分かれて論争した。

第一のグループは、ルーマニアは、西欧がたどった経済、社会発展と同様の途をたどるべきとして、農業的伝統主義的な立場に批判的で、「ヨーロッパ主義者」と呼ばれ、文芸批評家エウジェン・ロヴィネスクが代表的論客であった。これに対し、ルーマニア社会が農業的性格の社会であり、ルーマニア独自の社会的、文化的伝統・遺産に基づく発展を主張し、「伝統主義者」と呼ばれ、詩人、文筆家ニキフォル・クライニクおよび詩人哲学者ブラガが主要な論客であった。この論争は、国の発展をめぐる農業的ヴィジョンと産業的ヴィジョンの間の論争であると同時に、正教

とルーマニア人のアイデンティティー、キリスト教と農民の土着の宗教性、東方の正教と西欧のカトリック、合理主義に関する論争でもあった [HITCHINS 1994]。

エリアーデは、インド滞在以前はこの論争の局外にあったが、インド滞在中に論争の意義と重要性を認識した<sup>3)</sup>。後年、エリアーデの重要な宗教学概念になった「宇宙的キリスト教」あるいは「宇宙的宗教」の着想は、論争に対するエリアーデの一つの回答であったとの説がある [TURCANU 2010]。

### 3 主要フォークロア研究

エリアーデの主要なフォークロア研究は、その集大成である論文集『ザルモクシスからジンギスカンへ』(1970)、および1938年から1942年にエリアーデが編集、刊行した宗教学雑誌『ザルモクシス』(全三巻)によれば、次の通りである。

- ① マノーレ親方伝説(修道院建築に伴う人柱伝説)
- ② ミオリツァ(羊飼いの殺害と葬礼をめぐるバラッド)
- ③ マンドレーク伝説(魔術的植物をめぐる伝説)
- ④ 宇宙創造神話(いわゆる「潜水型」大地創造神話)
- ⑤ ルーマニア文学における民間文芸

本論では、ルーマニア民俗学の中心の研究テーマである「マノーレ親方伝説」、「ミオリツァ」、およびエリアーデが永く愛着を持って研究した「マンドレーク伝説」を取り上げたい<sup>4)</sup>。

#### (1) マノーレ親方伝説研究

マノーレ親方伝説は、橋、城塞、教会等の建築に伴う人柱伝説の一種で、同様の伝説は西ヨーロッパを含む世界各地に分布しているが、伝説をうたった口承叙事詩(バラッド、ルーマニアではバラードと呼ばれる)は、南東ヨーロッパでヴァリエーションが多数収集されている。

マノーレ親方伝説のルーマニア伝承バラッドの概要は次の通りである<sup>5)</sup>。

##### 第一節：修道院の建築場所の選定と建築の開始

黒い王子が十人の大工、石工を連れてアルジェシュの谷を訪れている。十人の棟梁にあたるのがマノーレ親方である。一行が修道院の建築場所を探していると、横笛を吹く羊飼いに会う。王子が羊飼いに道すがら打ち捨てられた壁を見たことはないかと尋ねると、羊飼いはあると答える。一行はこの遺構を探しに出かける。その壁の場所を見つけると、王子は、そこにこの世に比類のない高く厳かな修道院を建てるように大工、石工たちに命じる。王子はそれができれば財宝を与え、貴族に取り立てると約束するが、それができなければ壁に生き埋めにするかと脅かす。

##### 第二節：建築作業の障害と解決策の啓示

棟梁たちは急いで仕事に取り掛かるが、建築をはじめた四日間は、昼間仕上げた壁石が夜中に崩れてしまう。王子は棟梁たちを生き埋めにするぞと脅かすが、マノーレ親方は、一人休んで横になっていると夢をみて、天の声を聞く。マノーレ親方は、他の棟梁に天の声について語る。それは、翌朝一番に棟梁に弁当を届けに来た妻か妹を人柱にしなければ、壁は崩れるというお告げであった。マノーレ親方は、お告げの秘密を守るよう棟梁たちに頼む。

##### 第三節：マノーレ親方による妻の犠牲を阻止する努力

翌朝の明け方、飛び起きたマノーレ親方が道に見たものは、最初に昼の弁当を持ってくる親方の妻アナの姿であった。マノーレ親方は、雨が降って川の水があふれて、妻を引き返さずよう神に祈ると、神はそれにこたえて大雨を降らせるが、妻は足を止めなかった。今度は大風を祈り、神はそれにもこたえて風を吹かせるが、それでも妻は引き返さず、とうとう建築作業場に着いてしまった。

#### 第四節：妻の犠牲による建築の完成

ほかの棟梁たちは、アナを見てほっとするが、マノーレは妻を抱きしめ、腕をとり、壁の上に登らせて、怖がることはないと言をかける。冗談めかして人柱ごっこをしようと言いながら、アナを足下から埋めていく。アナは泣きながら夫に冗談はやめると訴えるが、マノーレは何も答えない。おなかの赤ん坊がつぶれるという妻の声を聞きながら、マノーレは妻を頭の上まで埋めてしまう。

#### 第五節：棟梁たちの死とマノーレ親方の死

完成した修道院にやってきた黒い王子は、棟梁たちに語りかける。これ以上に厳かで美しい修道院を他に建てることができるかと尋ねる。修道院の屋根に座った棟梁たちは、高笑いして答える。自分たちほどの棟梁は世界中さがしても他にはいない。自分たちの腕であれば、これよりもっと美しい修道院を建てて見せますと。王子は、これを聞き、思案にふけて、足場も梯子も外すよう命じた。棟梁たちは、屋根板で翼を作り、それを拡げて飛び降りるが、たちまちに落ちて体は砕けてしまう。マノーレ親方がいざ飛ぼうとすると、壁の中から苦しげに呼びかける妻の声が聞こえてくる。その声にうろたえ、目がかすみ、屋根から落ちてしまう。マノーレが落ちたところから、静かに泉が湧き出した。その泉の水は彼の涙でうすく塩辛いものだった。

エリアーデは、過去の人柱伝説研究を展望して、文学的美学的観点、歴史学の観点、民俗学者の観点、民族学者の観点および宗教史家の観点の五つの研究上の観点を挙げているが、一九世紀以来の研究は、伝説のヴァリエーションの収集、起源、伝播の経路・範囲、相互影響関係、民族的地域的帰属の問題等通時的な研究が主流を占めていた。二〇世紀になって、叙事詩の構造、機能、意味の分析等共時的な研究に関心が移った [栗原 1975、DUNDES 1996]。

エリアーデは、このバラッドの研究で宗教的神話的意味の解明に努めた。エリアーデは、文芸批評家ドゥミトル・カラコステアが、他のバルカン諸国、例えばセルビアのバラッドに見られるドラマでは、棟梁の妻とその母性愛が強調されているのに対し、ルーマニアのバラッドでは、マノーレ親方がドラマの中心にいることを指摘していることに注目し [CARACOSTEA 1942]、特に他のバルカン諸国のヴァリエーションには見られない、ルーマニア伝承バラッドの第五節のマノーレの死の意味について考察を進める。エリアーデは、民俗学者の中には、第五節は、バラッドのドラマが妻の人柱のストーリーで完結しているのを、蛇足であると見る人もいるが、第五節で語られるマノーレの運命のストーリーは蛇足ではなく、バラッドを啓示の形で完結させており、マノーレは「強いられた死」において、自ら犠牲となった妻を再び見出し、取り戻すのであるとその死を解釈している [ELIADE 1943]。

また、エリアーデは、人柱として供儀されたマノーレ親方の妻の死を「犠牲としての死」と解し、修道院の屋根から飛び降りた親方の死を「非業の死」と見て、この二つの「強いられた死」は、巨人（たとえばインド神話における原人プルシャ）が犠牲として死ぬことにより、宇宙が創造されたとする宇宙創造神話における死を反復、模倣したものであることを意味し、宇宙を創造した死と同様な「創造的な死」として解釈している [ELIADE 1972]。

エリアーデのこのような解釈に立つ研究を検討するため、建築の人柱伝説に関する論文集を編んだ米国の民俗学者アラン・ダンデスの所説により、現在の研究動向を見ていくこととする [DUNDES 1996]。

ダンデスは、一九世紀初頭に、セルビアの言語学者、文学者ヴーク・カラジッチが、人柱伝説である「スカダル城の建設」のバラッドを含むセルビア民衆歌謡集を公刊して以来、伝説研究は神話・儀礼理論に基づく比較方法による研究が主流で、南東ヨーロッパの民俗学、言語学等の研究者は、第一に、人柱伝説が、橋の建設や築城に伴い、建築を妨害する土地の超自然的な精霊を宥める

ため、人身供儀が実際行われた風習が残存したものを表しているとする残存説により研究し、第二に、バラッドがどの民族、地域を起源とするかを確定する研究に執着したと論じている。

更に、研究者がバラッドを美学的芸術的観点から評価し、起源論研究が研究者の属する国や民族と関連付けられ、偏狭なナショナリズムに基づいて行われ、研究対象地域も南東ヨーロッパに限定されていると偏った研究姿勢を指摘している<sup>6)</sup>。ダンスは、こうした研究姿勢からは新たな研究は生まれないと、民俗資料の研究対象の拡大、新たな方法・視点による多様な解釈の可能性を探求するよう、次のような研究を提唱している。

第一に、比較方法を有効な研究方法とするためには、利用可能なバラッドや民間説話を広範に研究対象にする必要があり、バルカン地域と同様な人柱伝説を伝承しているインドにおけるバラッド、民間説話のヴァリエーションおよびインドの民俗を媒介しているジプシーのバラッド、民間説話を比較研究の対象にするべきである<sup>7)</sup>。

第二に、人柱伝説のバラッドの歴史的地理的分布状況を明らかにするだけでは、この民俗の意味の解明に資することにならず、南東ヨーロッパのような単一の文化の間だけでなく、他の異なる文化との比較において、バラッドを新たに解釈する必要がある。

第三に、南東ヨーロッパのバラッドは、男性（棟梁、石工）の視点で表現されているが、犠牲の対象（主として女性である妻や妹）から見た新たな解釈の可能性もある。例えば、親方の妻が建築物の柱や壁に生き埋めにされることを歌ったバラッドは、バルカン社会のような男性中心社会の家庭の中に閉じ込められた女性の結婚生活を隠喩的に表現していると解釈することも可能である。

ダンスは、エリアーデのバラッド研究について、エリアーデは、ルーマニアの民俗に永く関心を持ち、神話・儀礼理論をかなり適用しているが、ユングの元型の考えにも示唆を受け、バラッドは先史時代からの建築に伴う犠牲神話の残存であり、過去と現在を固く結びつけており、現代的であると同時に古代からの民俗の残存と考えていると分析している。

## （2）ミオリツァ研究

ミオリツァは、一九世紀中葉に、詩人ヴァシーレ・アレクサンドリにより公刊されて以来、ルーマニア人の創造的精神を明らかにするものとされ、「マノーレ親方」のバラッドとともに最も人気の高い民衆叙事詩の一つである。

エリアーデは、バラッドの公刊以来流布している、バラッドは、死を前にした諦念と宇宙への回帰のノスタルジアを歌ったものであるとする典型的解釈を根拠のないものと考え、バラッドは、ルーマニアの文化において、フォークロアと民衆の精神史上の問題を提示するとともに、ルーマニア人の観念の歴史の中心的一章を提示するものと考えた [ELIADE 1972]。

バラッドの概要は次の通りである<sup>8)</sup>。

### 第一部

高原のふもとの楽園の入り口を谷沿いに三つの羊の群れと三人の羊飼いが降りてくる。

一人はモルドヴァ人、一人はハンガリー人<sup>9)</sup>、もう一人はヴランチャ人。ハンガリー人とヴランチャ人は、日が沈めば、モルドヴァ人の羊飼いを殺そうと二人でしめし合わせた。彼は、いちばん豊かで、たくさんの肥えた羊、賢い馬と勇ましい犬を持っている。

### 第二部

雌子羊のミオリツァは、ここ三日、草も口に入れずに鳴き続けている。モルドヴァ人の羊飼いはミオリツァに、三日も草も食べずに鳴きやまないが、病気なのかと尋ねる。ミオリツァは、羊飼いに、羊の群れを草が生え、羊飼いにとって隠れ場になる岸辺の林に追い、一番勇敢な犬を呼ぶよう勧める。そして、ハンガリー人の羊飼いとヴランチャ人の羊飼いが主人の羊飼いを殺そうと

していると告げる。

### 第三部

羊飼いはミオリツァに言う。「雌子羊のお前には先が見通せるようだが、もしこの草原で死ぬことになるのなら、ハンガリー人とヴランチャ人の二人に、自分を羊たちの通り道に、小屋の裏手に埋めるように言ってくれ。また、枕元には笛を置いてくれ、風が立てば笛は鳴り、羊たちが血の涙で泣くだろう。だが、殺されたとは羊たちには言うな。みんなにこう話してくれ。この楽園の入り口で、自分はきれいな王女様、世界の花嫁と結婚したと。婚礼のとき星が一つ流れた。太陽と月が花の冠を捧げ持った。立会人はぶなとすずかけの木々。司祭は高い山々。楽師は鳥たち。そして燭台は空の星。」

### 第四部

羊飼いはミオリツァに更に言う。「もし、自分を探し回っている年老いた母親を見かけたら、この楽園の入り口で王女様を嫁にもらったと話してくれ。でも、自分の婚礼に星が流れたとは母親には言うなよ。」

エリアーデによれば、ミオリツァ研究は、バラッドの起源、歴史の再構成をめざす歴史的研究、ヴァリエーションの収集と文化のコンテクストにおいて民間伝承の分析を進める民俗学的研究、およびバラッドを国民精神の真髓の表現とみて、ルーマニア人の独特の存在形態を明示するものであると解釈する文学的哲学的研究の三つの観点から次のような研究が行われた [ELIADE 1972]。

第一に、言語学者オヴィド・デェンスシャンヌは、バラッドは、移牧 (transhumance) の際の経済的対立を背景として三、四世紀前に成立し、多層の民俗的要素を含み、キリスト教以前の異教的な思考がみられると分析した [FOCHI 1964]。

第二に、文芸批評家カラコステアは、バラッドに描かれている事件は歴史的事件でなく、世界についての詩的想像力を生み出す「人間の原始的な経験」が描かれており、羊飼いの仕事 (牧畜) に対する愛情と古典的な楽観的感情を表現していると美学的に解釈している。

第三に、民俗音楽学者コンスタンティン・ブライロイユは、死を結婚に擬する考えは先史時代に根をもつ古くからある考えであり、若者の葬式に際し、死者の婚礼儀式を執り行うことは、死者の魂を安らかに死者の国に送り届けることを目的としており、この世の生者を死者から守るために行われると解釈し、また、ミオリツァにおいて、葬式の際に歌われる哀歌にかわって、羊飼いの羊たちの嘆きに置き換えるように、農民の儀式において、儀式上の本来必要とされる事物や器具をその場の偶然の事物や器具で置き換えて間に合わせることが起きると民俗学の観点から論じている [BRĂILOIU 1984]。

第四に、哲学者ブラガは、ルーマニア人が形成され、暮らしている山地と平地の間の特別な地平を「ミオリツァ的空間」と名付け、ルーマニア人の宿命論、無歴史的態度を分析し、ルーマニア人の精神性の特徴として「死への愛」があると解釈している [BLAGA 1944]。

エリアーデは、若者の死者の婚礼儀式を死者の禍なす力に対する生者の防護に還元する考えや羊飼いの楽観主義を牧畜という仕事に対する愛情ととらえる解釈の限界を指摘し、ミオリツァに描かれる「神秘的結婚」は、自らの運命の意味を変えたいとする羊飼いの意思を表しており、また、歴史上、強大な民族の侵入や破局に晒されていることを自覚している (エリアーデはこの自覚をもたらすものを「歴史の恐怖」と呼んでいる) ルーマニア人は、羊飼いの運命を自己の運命に重ね合わせており、ルーマニア人がこのバラッドの傑作に永く愛着していることがその証であると説いている [ELIADE 1972]。

ミオリツァの千を超えるヴァリエーションを集大成した民俗学者アドリアン・フォキは、最初の公

刊以来長い年月が経過したにも拘わらず、この叙事詩について実際分かっていることは少なく、確実に分かっていることは次の諸点であると指摘している。

第一に、ミオリツァは、国内外のルーマニ人に最も流布している口承叙事詩である。

第二に、ミオリツァは、社会的役割の観点から見ると両義的なところがあり、トランシルヴァニア以外の地域ではバラッド形式でストーリーは深層心理に沿って展開するが、トランシルヴァニアではコリンダ（クリスマスや新年の祝いに歌われる儀礼歌）形式でストーリーの民族誌的基層を表している。

第三に、この叙事詩は、明らかにあらゆる人々のためにつくられている。トランシルヴァニアのヴァージョンは、より古く原始的で、発生時の形を留めており、それ以外の地域のバラッドは、芸術的な表現に変わる傾向にある。

第四に、トランシルヴァニア以外の地域のバラッドは、「千里眼の雌子羊」のエピソードを含んでいるが、トランシルヴァニアのコリンダはこのエピソードを欠き、ストーリーも羊飼いを中心に展開する。

第五に、トランシルヴァニアでは、ドラマは羊飼いと殺害者の間で展開する。それ以外の地域では、ドラマは羊飼いの意識の中で起き、「千里眼の雌子羊」は羊飼いの分身を象徴している。ドラマの葛藤は、羊飼いの自然な防御本能と自然の秩序において、避けがたい状況を平静に思慮深く受容することとの間に起きる。したがって、宿命論や諦念をここでは議論できない。

第六に、トランシルヴァニアでは、羊飼いの置かれた唯一の問題は、未婚の状況により求められる儀礼がおこなわれることである。儀礼が遂行されないと、羊飼いの精神の安らぎと社会の平安が危険に晒されることになる。他の地域でも、こうした考えはみられるが、ミオリツァは宇宙を舞台とする壮大な変貌のドラマとして考えられている。

第七に、ミオリツァは、口承叙事詩として歌われるものであり、読まれたり、朗読されたりするものではない。

第八に、ミオリツァは、非常に抽象的なもの、現実には存在しないものを表現している。口承叙事詩が現実的具体的なものとなるのは、歌い手により歌われる時である。唯一の現実は、口承叙事詩が、主観的、客観的要素の機能、すなわち歌い手の才能、レパートリーの豊富さ、聴衆の受け等により、歌として成功するか否かである。

フォキは、エリアーデが、ミオリツァは、民衆の意識における芸術的、シンボリックおよび儀礼的な価値を反映しているとみており、ルーマニア人に最も流布した背景を解明したと評価するとともに、エリアーデが「千里眼の雌子羊」のエピソードの新しい、興味深い解釈を提示したと論じている [FOCHI 1987]。

エリアーデは、「千里眼の雌子羊」のエピソードが、民俗的価値の世界では、羊飼いが、敵に対して身を守るように、運命に対しても、身を守ることができないとする深い実存的決断を明らかにしている。アレクサンドリやその他のヴァージョンでは、雌子羊は殺害者の陰謀に関する情報を羊飼いに伝えるのではなく、神託の形で「すでに決断されたこと」を「啓示」しているのであり、牧畜社会は、古い狩猟文化から、動物たちが身振りや意外にも外に漏らすことから、動物たちが未来を知っているゆえに神託の機能を持っているという信仰を受け継いでいるのであり、運命は雌子羊により啓示されたのであると論じている [ELIADE 1972]。

これに対し、フォキは、エリアーデが、雌子羊が言葉の理解力を得ていることを認め、「千里眼の雌子羊」を意味すると直観し、ミオリツァのすべてのヴァリエーションが表現していることを超越して、雌子羊に神託性を付与しているが、雌子羊は、未来を見通す力を持っているのではなく、偶



然に、陰謀の話聞き、異常な振る舞いによって羊飼いに危険を知らせるのであって、エリアーデはルーマニアの民俗の一部の事例により先走った議論をしていると論じ、更に、「千里眼の雌子羊」のエピソードは、真実の正しい民俗的価値観に基づいて評価すべきであり、雌子羊に神託性を見る考えは避けるべきであると批判している [FOCHI 1985]。

フォキの研究は、「千里眼の雌子羊」のエピソードがミオリツァに不可欠な構成要素でないことを明らかにしており、更に、民俗の世界において、ミオリツァが伝えるテーマの核心は何かという問いを惹起しているように思われる。フォキは、ミオリツァの中心が、大きな闇と沈黙に覆われており、神秘と芸術的な高貴さを深めているとミオリツァの研究において未解明な部分が多いことを指摘している [FOCHI 1987]。

ミオリツァは、依然深い謎を秘めた民衆の詩である。

### Ⅲ エリアーデと日本の民俗学・民族学

エリアーデは、いつの頃から日本への関心を抱いていたのであろうか。その正確な時期は明らかでないが、エリアーデは、1920年代の早い時期に近東、ペルシャ、インド等東洋への関心を持ち始めたと回想している [ELIADE 1981]<sup>10)</sup>。

エリアーデは、その宗教学の代表作となった『永遠回帰の神話』や『宗教学概論』において、日本の民俗学、民族学および神話学の成果、すなわち岡正雄、松本信広、沼澤喜市、出口米吉らの研究を取り入れ、また、シャーマニズム研究において、堀一郎、中山太郎、岡正雄、鎌田久子、沼澤喜市らの業績を参照し<sup>11)</sup>、「マンドレーク伝説」の研究では、南方熊楠のマンドレーク論の貢献を評価している。

更に、日本人の研究以外にも、オーストリアの日本学者 A. スラヴィクおよび民俗学者 M. エダー、イタリアの宗教学者 R. ペッタツォーニ、およびフランスの日本学者 M. C. アグノエルを含む日本研究の成果を取り入れている<sup>12)</sup>。

本論では、「マンドレーク伝説」研究および『永遠回帰の神話』における、日本の民俗学、民族学に対する研究と関心について論ずる。

#### 1 マンドレーク伝説研究

##### (1) エリアーデの関心と研究

エリアーデは、インド滞在以前の早い時期から呪術的植物であるマンドレークの神話と民俗に関心を持ち、この神話と民俗が古代からあり、西洋だけでなく東洋にも広がっていると認識し、生涯にわたりマンドレークに関する研究を続けた。ルーマニア時代の1933年に、エリアーデは、助手を務めていたブカレスト大学の哲学教授ナエ・イオネスク<sup>13)</sup>が主宰する新聞『クヴントゥル(言葉)』にマンドレークに関する論文を寄稿する一方、自ら創刊した宗教学雑誌『ザルモクシス』の第一巻(1938)に「ルーマニアにおけるマンドレーク信仰」、第三巻(1940-1942)に「マンドレークと「神秘的誕生」の神話」とそれぞれ題する論文を掲載した。また、1939年に、新聞『ユニヴェルサル・リテラル(文学界)』にほぼ同様の論文を寄稿した。雑誌『ザルモクシス』に掲載した二論文は、エリアーデのマンドレーク研究を代表する論文であると思われるので、これらの論文によりエリアーデのマンドレーク論を検討したい [ELIADE 1938-1942]。

雑誌『ザルモクシス』第一巻の論文は、ルーマニアの民間信仰における、マンドレークの呪術的医薬的効能および採取の儀礼について、ルーマニア各地の民俗資料を分析し、マンドレーク信仰の

特徴を次のように抽出し、この信仰が古代において同様な威信を持ち、東洋にもあったと指摘している。

第一に、ルーマニア人は、北欧やドイツにみられる、マンドレークが絞首刑者の精液から生え出るとの伝説や他の東欧にみられる、黒い犬に助けられたマンドレーク採取の儀礼を知らない。

第二に、マンドレークは優れて恋愛の草であり、恋、結婚、多産をもたらす効果があり、財を増やす呪術的効力を持つと信じられている。

第三に、マンドレークの採取は、一つの儀礼を構成し、儀礼には性的清浄、清潔、沈黙等の順守が課せられる。

第四に、マンドレークの採取は、一連の呪術的所作と万全の準備で行われる。採取は満月とともに行うべきである。

第五に、マンドレークの草には代価（塩、パン、砂糖、ブドウ酒等）を支払わなければならない。さもないと効果がない。

第六に、マンドレークの草は極めて危険な草であり、儀礼通り採取されなかったり、十分な配慮を欠く場合、呪術的效果は採取人に対して逆の力として働く。

第七に、この草は、善悪どちらにしろ、自然の通常の力を超えた威力を有する草として恐れられ、尊敬されている「生命と死の草」である。

第三巻の論文は、マンドレーク伝説の流布が、古代より近代まで続き、地域的にもヨーロッパより、オリエント世界、アラブ世界さらに中国にまで広がっていることを人類学者フレイザー、イスラムの薬物学者イブン・アル・バイタル、ギリシャの植物学者ディオスコリデス、ヘブライの哲学者マイモニデスおよび中国の中世等の資料により論じている。

更に、この植物とイラン神話における人類最初の人間ガヨーマルトの死との関係、救世主キリストの磔の刑による死との関係を論じ、また、「強いられた死」により死んだ刑死者や超越者の種から、更には、植物の種子から人間が生まれたとの人類起源神話との関係を論じている。

## (2) 南方熊楠のマンドレーク論

南方熊楠は、少年の頃、寺島良安の『和漢三才図会』を筆写して読破し、山野を跋涉して自然に対する観察力を鍛えて成長した植物学者にして民俗学者であり、いつの頃から呪術的植物であるマンドレークについて関心を持ったかは明らかでないが、ロンドン時代にマンドレークに関する三篇の論文を英国の雑誌『ネイチャー』に投稿している [MINAKATA 1895、1896、1898]。

これら論文により南方熊楠のマンドレーク論を見てみよう。

雑誌『ネイチャー』の1895年4月25日号に掲載された第一論文は、同誌の同年4月11月号に言及されたオランダの学者フェート教授のマンドレークに関する論文に関連して、中国においてもヨーロッパのマンドレーク伝説と同様の俗信があることを指摘し、謝肇淛の『五雜俎』に言及されている Shang-luh (商陸、*Phytolacca Acinosa*) と称する植物についての一節を引き、「商陸」が死体の上に生え、その根の多くは人間の形をしていて、根を掘り起こすと言葉を話すようになり、白赤二種類あって、赤いものは過って食べると死ぬと記載されていると、この植物とマンドレークの類似性を論じている。

翌年の1896年8月13日号に掲載された第二論文は、更なる探索の結果、第一論文で指摘した二点の類似点のほかに八点の類似点が見つかったとして、マンドレークにも絞首刑台の下に生えるといわれているとの記述があり、「商陸」は人の言葉を話す能力を得る際、その周囲に鬼火が群がるとされているが、マンドレークにも夜、ロウソクのように光ると伝えられている等の類似点を挙げ、マンドレークと「商陸」についての民俗が、起源についてはともかく、別々に発生したとの可

能性は否定されるとし、これらの植物に関する民俗の独立発生説を否定し、文化伝播説を唱えている。更に、宋代の文人周密の著した『志雅堂雜鈔』に記載されている「押不蘆（ヤプル Yah-puh-lu）」なる名称は、「イブル（Ybruh）」すなわちアラビア語の「マンドレーク」に相当する語に他ならないと論じている。

第三論文は、1898年3月3日号に掲載された短い論文で、第二論文の脚注で人や獣の姿をとるといわれた植物について、中国の文献を引用し、それら植物の大半が、根や地下茎が人や獣の形をしていると説明したが、中国では、これら植物の一部は寄生された花の部分に奇形が生じ、人や獣の形になると想像したようだと、第二論文の説明を訂正している。

### （3）南方熊楠のマンドレーク論に対する評価と批判

南方熊楠の雑誌『ネイチャー』への投稿論文は、掲載後直ちに雑誌『通報 T'oung pao』（1895年第六巻）、雑誌『国際民族誌報』（1895年第八巻および1899年第十二巻）に転載された。また、『米古代東洋雑誌』（1901年第二十三巻）において、米国の人類学者フレデリック・スタールは、投稿論文を引用し、南方熊楠のマンドレーク伝説の伝播説を支持すると評価している〔STARR 1901〕。投稿論文は、その後、様々な著作、論文において、マンドレーク伝説の東洋との関連を明らかにした文献として引用され、評価されるに至った。

しかしながら、米国の東洋学者ベルトルト・ラウファーは、雑誌『通報』（1917年第十八巻）に掲載された論文「マンドラゴラ」において、「南方熊楠は、中国資料を使った（マンドレークに関する）テーマに関する短い報告を行っているが、方法論も批判力もないものである。……マンドラゴラと「商陸」の関係は、心理的並行例であって、歴史的関係ではない。……私（ラウファー）は、独自にすべての文献を見つけ、南方熊楠の論文を偶然に入手したときには（マンドレークに関する）論文は出来上がっていた。」と南方熊楠の研究方法与マンドレーク伝説の東方伝播説を批判し、独立発生説を示唆し、「商陸」に関する中国文献の最初の発見者は自分（ラウファー）であると主張した〔LAUFER 1917〕。

### （4）エリアーデの評価

エリアーデは、新聞『クヴントゥル』の1933年11月13日号に寄稿した論文「マンドレーク伝説：ノートと書誌」において、マンドレークの魔術的特性を創造、誕生に関連した宇宙的性格、真珠、貝、海に関する地中海およびオーストロアジアの民俗との関連で論じ、その関連書誌としてラウファーやフレイザー等の文献とともに南方熊楠の雑誌『ネイチャー』への二編の投稿論文を挙げ、初期のマンドレーク研究において、南方熊楠の研究も視野に入れていたことを示唆している〔ELIADE 1933〕。

また、前述した雑誌『ザルモクシス』第三巻に掲載した論文「マンドレークと「神秘的誕生」の神話」の第三章「マンドレークと中国における魔術的植物」において、地中海世界の人々に知られたマンドレーク伝説がイスラム教徒を通じて宋の時代に中国に伝わったとし、ラウファーの論文とともに南方の投稿論文を引いて、「ya-pu-lu」と称せられる植物や朝鮮人參「ginseng」以外にもマンドレークに類似した植物「shang-luh」が中世の中国に知られていたと論じ、「南方は、「shang-luh」について記した中国文献につき報告し、この植物が中国において、マンドレーク「Mandoragora officinarum」の位置を占めることを確認した最初の人物である」と「shang-luh」と称する植物とマンドレークを最初に同定した南方熊楠の先駆的研究を高く評価した〔ELIADE 1940-1942〕。

## 2 『永遠回帰の神話』

### (1) エリアーデの関心と研究

エリアーデは、インドから帰還後、1930年代から40年代初頭にかけて、ヨーガや錬金術の研究を発表する一方、その宗教学の基礎となる次のような考えを形成し、こうした思考は、後に、エリアーデ宗教学の基本的文献となる『宗教学概論（比較宗教類型論）』や『永遠回帰の神話』に結実した。

第一に、宗教研究にとり、宗教的思考とともにシンボルや神話に基づく思考が重要であると認識し、そうしたシンボルや神話が生じたと考えられる時代として先史時代を想定し、この時代を積極的に評価するようになった。

第二に、ルーマニアおよびバルカン地域のフォークロアに強い関心を持ち、フォークロアは宗教・宗教史研究に新しい視点を導入する鍵であると考えた。フォークロアは、民衆の創造の源である神話、形而上的思考、魔術等の本質的レベルの要素と民衆の記憶に偶然に保持される出来事や人物に関する直接の歴史的現実との間を媒介するものであり、現実の歴史が保持しえない、原始的な精神形態を集合的記憶により保持するものであると考えた。

第三に、ルーマニアおよび南東ヨーロッパの地域を東洋の一部として統合し、西欧と対照的な精神的伝統を持った地域として見ようと試みた。

エリアーデのこうした考えは、近代歴史学とその歴史主義に対する批判となり、『永遠回帰の神話』で反歴史主義の立場を明らかにした<sup>14)</sup>。また、アジアと南東ヨーロッパとの関係につき、当初、積極的なイメージを持ったが、後年、第二次世界大戦の破局と共産勢力によるルーマニア支配により、アジアの他の側面にも注目し、「歴史の恐怖」に晒された民衆の歴史的記憶とフォークロアの記憶との関係につき、歴史的出来事による恐怖に対し、民衆が古代的集合的な記憶による防御姿勢で対抗しているとして、更に、歴史主義に対する批判を強めた [TURCANU 2010]。

### (2) 日本への関心と研究

このような経緯で著された『永遠回帰の神話』において、エリアーデは日本に対し、どのような関心を示しているのだろうか。

『永遠回帰の神話』の和訳者で、生前のエリアーデと個人的関係を築いた宗教学者の堀一郎は、その訳書の「訳者あとがき」で、本書を次のように評価している。

「著者（エリアーデ）の意図した古代文明人や伝承文化人の抱懐してきた歴史観や宇宙観に対する透徹した新解釈、またそれをもってヘーゲル以降の直線的歴史観に根差ざるマルキシズム史観と絶望の実存哲学に勇敢に立ち向かい、ヨーロッパに新しいキリスト教的な救いを与えようとする……それと同時に、本書は、私（堀一郎）が久しい間問題として抱いてきた「民間伝承」なるものの、極めて根強く、社会の変革に堪え、また久しき時間の流れに堪え得てきた持続性と継承性の解明に、一つの光を与えるものとして、高く評価され得るものと思う。……伝承性の奥に何があるか、何が伝承を支えてきたかは、こうした古代の、そして現在の民衆の中に持たれてきた宇宙論、時間論、存在論に基盤を求めなければならないと思う。本書はその意味で、単に宗教史、歴史哲学の書であるだけでなく、また民俗学理論としてもすぐれた示唆を与えるものであることを疑わない。」 [エリアーデ 1963b]。

こうした観点を参考にして、本書におけるエリアーデの日本に対する関心を見ていくこととする。

エリアーデは、本書の第二章「時間の再生」で、時間の再生に伴う儀礼と信仰について次のように論じている。

伝承社会では、時間の観念につき、一定の時間の初めと終わりの観念があり、この観念は、生宇

宙的なリズムの観察と季節的純化（祓浄、断食、罪の告白等）と生命の季節的更生の観察に基づく。季節的な更生は、特に歴史的文明において、新しい天地創造、天地開闢のわざの反復を前提としている意味で特に重要であり、定期的な年中行事につき、便宜上二つの表題、すなわち①悪魔、病気、および罪の年毎の駆逐、②新年に先立ち、また、元日に続く日々の儀礼に括ることとする。

エリアーデは、かかる認識に基づき、世界各地の時間の再生に関する信仰と儀礼について論じているが、日本に関しては、オーストリアの日本学者アレクサンダー・スラヴィクの論文「日本とゲルマンの祭祀秘密結社」（1936年）に拠り、次の通り論じている。

第一に、インド・ヨーロッパ民族、シュメール・アッカド人やエジプト人等の近東民族において記録されている正月の神話・儀礼の文化複合は、その類似の形態が中心を異にした日本文化にも見いだされる。

第二に、日本では、ドイツ人の間におけるように、一年の最後の夜に馬などの葬送用動物や地下的葬送の男女神が出現する特徴があり、秘密集団の仮面行列や、死者の生者訪問、イニシエーションが行われ、これらの秘儀社会は非常に古く、ユーラシア大陸の東方および西方の「来訪者」の儀礼複合は歴史時代以前に発達したものである。死者の来訪は、しばしば、男性秘儀社会の儀礼の際に起きる。

第三に、日本の伝承は、一年の終わりに結びつく観念、すなわち「タマ」複合と呼ばれる観念を保存している。「タマ」は人間や死者靈魂、また「ヒジリ」のうちに見出される精神的実体であり、冬から春に移るとき動きやすくなって肉体から離れようとし、また、生者に死者が近づくよう促すが、年末年始の行事の目的の一つは、この「タマ」の固定にあるようだ。

第四に、この「タマ」にまつわる儀礼については、特に年ごとの危機が起きることを強調したい。すなわち（伝承社会における）「原始的な経験」は、「タマ」の危機に避けがたい「混沌」を感じる。この「混沌」は、「タマ」を更新、再生させ、歴史をその始源において取り戻すため、一定の歴史的時期に終わりを告げさせようとするものである [エリアーデ 1963b]。

エリアーデが参照しているスラヴィクの論文は、日本に関する論拠を、1933年に民族学者岡正雄がウィーン大学に提出した博士論文『古日本の文化層』に多く拠っている [SLAWIK 1936]。しかし、エリアーデは、本書を構想している1940年代前半には公刊されていなかった岡正雄の博士論文を直接参照する機会を持たなかったと推察され、また、岡正雄の博士論文の論拠の一つとなった柳田國男や折口信夫等の日本民俗学の成果をあまり参照できなかったと思われる。

エリアーデは、前述したように、1930年代から1940年代にかけ南東ヨーロッパと東洋の関係につき強い関心を持っており、日本への関心も強かったが、本書の日本に関する記述に限っては、日本の民俗学、民族学への関心につき、時代的制約を蒙っていたのではないかと思われる。

#### IV おわりに

冒頭述べたように、本論は試論であり、更に次のような課題に取り組み、研究を進めていきたいと考えている。

- ①エリアーデのフォークロア研究と宗教学研究との関係につき、本論で取り上げなかった『宗教学概論』、「宇宙創造神話」研究、シャーマニズム研究等のより広い研究を対象に解明する。
- ②エリアーデのフォークロア研究と創作活動との関係につき検討する。
- ③フォークロア研究とエリアーデの政治思想、活動（両大戦間期における極右政治運動への関与、戦後のルーマニア社会主義政権との関係、亡命者としての活動等）との関係を検討する。

④民族やナショナリズムの視点から、エリアーデのフォークロア研究を再考する。

注

1) エリアーデのフォークロア研究について、ルーマニアの民俗学者は、エリアーデは文字通りの民俗学者ではないが、古代世界に関する知見や古い民俗に表れている民衆の観念を探求する新しい方法や展望を提示したと評価している [BÎRLEA 1974, DATCU 1979]。

また、我が国では、1970年代に、宗教学者柳川啓一が、ルーマニア時代のエリアーデ研究とともに、バルカンの農民の「コスミック」なキリスト教を探求し、「民間神学」の発掘の気概にうらづけられた学問としてフォークロア研究の重要性を指摘しているが [柳川 1973]、それ以来、フォークロア研究を対象にしたエリアーデ研究が行われている [奥山倫明 2000、新免 2010、奥山史亮 2012]。

2) エリアーデは、1937年に発表した論文「認識の手段としてのフォークロア」において、フォークロアおよび民族誌の資料が認識手段として重要であるとの研究事例として、ルーマニアの詩人哲学者ルチアン・ブラガのフォークロア、民族誌に基づいた文化哲学や人類学者フレーザーの「感染呪術」の理論に基づく研究を挙げ、歴史学が顧みない聖人の奇跡譚や心理学のいわゆる「潜在感覚 (pragmatic cryptesthesia)」および「身体の中空浮揚や難燃性 (levitation and incombustibility of the human body)」等にみられる「奇跡」や超常的現象をめぐる俗信や迷信を検証すると、そうした俗信や迷信は、未開人や文明国の民衆の経験的事実に基づいているとの認識を示した [ELIADE 1937]。なお、エリアーデの文化理解は、文化的創造の背後には無意識的で認識できない超越的存在があり、個々の文化はこの超越的存在の表れによって、それぞれ独自の「様式 (style)」を持つと説くブラガの文化認識の影響を受けている [ケイヴ 1996、BLAGA 1944]。

3) エリアーデ研究者フロリン・ツルカヌによれば、エリアーデは、インドのカルカッタ発 1931年3月15日付けのイタリアの宗教史学者ヴィットリオ・マッキオーロ宛書簡のなかで、インド滞在経験により、バルカンにおけるキリスト教以前の宗教的フォークロアの重要性に気づき、ルーマニアの知識人論争を起こした哲学者ブラガの論文「ルーマニア人の非ラテン的要素の反抗」が意味するものを理解したと伝え、また、エリアーデの基本的宗教学概念である「宇宙的キリスト教」なる用語をこの書簡の中で最初に使った [ȚURCANU 2010、ELIADE 2004a]。

4) 「マンドレーク伝説」研究については、Ⅲで後述する。

5) 「マノーレ親方伝説」のバラッドの概要については、ルーマニア文学翻訳家住谷春也の訳業およびエリアーデ研究者奥山倫明の概要説明を参考にした [住谷 2008、奥山 2000]。

6) フォークロア研究におけるナショナリズムを表す事例として、ルーマニアの民俗学者が、ハンガリーの民謡採集者が採集した民謡を剽窃したものとして訴えた事件がある。

ルーマニアの民俗学者ユリアン・グロゼスクは、1863年にハンガリーの民謡採集者ヤーノシュ・クリザが公刊した民謡・民謡集『野バラ』に収録されている、人柱伝説を歌った民謡を含む2編の民謡をルーマニア民謡から剽窃し、翻訳したものであるとして非難し、提訴した。ハンガリーの代表的民俗学者ジュラ・オルトゥタイは、この「野バラ論争」について、ルーマニアの勃興するナショナリズムによって起こされた、根拠のないものであり、ハンガリーのナショナリズムはかかる非難に対し防御した。クリザの採集作品とセーケイ (ルーマニアのトランシルヴァニア地方 (注9) 御参照) に居住するハンガリー系少数民族の民間伝承詩は、無関心と非難に抗して残存し、今後もクリザを支持して語られるとコメントしている [ORTUTAY 1972]。

7) ダンデスは、人柱伝説研究におけるインドのヴァリエントの重要性を指摘するとともに、バラッドのインド起源の可能性を示唆しているように思われるが、バラッドの民族的・地域的伝播、分布の問題について、南東ヨーロッパの一部の民俗学者は、バラッドはグルジアやアルメニア等のコーカサス地方が起源であるとの仮説を次のように唱えている。

ハンガリーの民俗学者ラヨシュ・ヴァルギヤスは、南東ヨーロッパとグルジアのバラッドは、モチーフ等において類似しており、特にコーカサスとドン河の間を古い故地にしていたハンガリー人の間にグルジアにおける古いコーカサスの伝統の要素が広がり、バラッドが直接にハンガリー人に伝わったとの説を唱えた [VARGYAS 1967]。

他方、ルーマニアの言語学者、民俗学者ボグダン・P・ハスデウは、アルメニアのヴァン湖畔の町名 Argeș と人柱伝説が知られているルーマニアの修道院所在地の地名 Argeș が相似しており、中世にアルメニア人が修道院付近に移住してきた歴史があることを指摘したが [HASDEU 1974]、アルメニア出身のルーマニアの歴史家 H. Dj. シルニは、ハスデウの指摘に基づき、アルメニアよりの移住者が、「マノーレ親方伝説」の基となったアルメニアの伝説をもたらしたとの説を唱えた [FOCHI 1987]。

- 8) ミオリッツァの概要については、ルーマニア文学翻訳家住谷春也の訳業を参照した。
- 9) ミオリッツァに表れる羊飼いの「ハンガリー人」は、ルーマニアのトランシルヴァニア地方（中・北部地方で、ルーマニアではアルデアルとも言う）出身の人を指し、いわゆるマジヤール人を指していない [ALECSANDRI 1978]。
- 10) エリアーデの日本への関心について、エリアーデは、1920年代後半から1930年代にかけて、新聞『クヴントゥル（言葉）』や週刊誌『ヴレメア（時代）』へ寄稿した記事において、日本および日本人について書いている。1929年1月26日号の同紙において、インド留学のために乗船していた日本船に同乗していた日本人について報告記事で触れ、1938年には、清少納言の『枕草子』の紹介記事、および1934年に創設された「国際文化振興会」に関する記事を書いている。また、『ヴレメア』誌には、1938年に、日清戦争や日本をめぐる国際情勢についての記事を寄稿している [HANDOCA 1997, ALLEN 1980]。
- 11) エリアーデが『宗教学概論』およびシャーマニズム研究において参照している日本の民俗学、民族学および神話学の主要な研究は、次の通り。
- 1 『宗教学概論』
    - 松本信広『日本神話試論』（1928）
    - 沼澤喜市『日本神話に於ける宇宙の生成』（1946）
    - 出口米吉「我國に於ける石崇拜の痕跡」『東京人類学雑誌』第二四卷第二七一号（1908）
  - 2 シャーマニズム研究
    - 中山太郎『日本巫女史』（1930）
    - 堀一郎『我が國民間信仰史の研究』（1953）等
    - 岡正雄『古日本の文化層』（1933）
    - 沼澤喜市『日本神話に於ける宇宙の生成』（1946）
    - 鎌田久子「神の嫁：日本および沖縄におけるシャーマン、巫女」In Monumenta Nipponica Monographs, No. 25（1966）
- 12) エリアーデが参照している外国の代表的な日本研究は、次の通り。
- A. スラヴィク「日本とゲルマンの祭祀秘密結社」（1936）（後述のⅢ 2 御参照。）
  - M. エダー「日本のシャーマニズム」（1958）
  - R. ペッタツォーニ『日本神話論』（1929）
  - C. M. アグノエル『日本文明の起源』Vol. I（1956）
- 13) ナエ・イオネスク（1890-1940）は、ブカレスト大学の論理学、形而上学の教授で、ソクラテス的な独特の教え方で知られ、「トライリズム（träirism 生きられた経験主義）」と呼ばれた生の哲学を提唱し、ルーマニア国王カロル二世の側近となったが、後に国王と袂を分かち、極右政治運動である「鉄衛団」運動のイデオログとなった。
- イオネスクは、エリアーデをはじめエミール・チョラン（シオラン）、エウジェン・イオネスク（ウージェーヌ・イオネスコ）、ミハイル・セバスチャン、コンスタンティン・ノイカ等の「新しい世代」と呼ばれた若い知識人の精神的指導者となり、一部の若い知識人は、イオネスクによって「鉄衛団」の運動に誘い込まれた（なお、エリアーデの「鉄衛団」運動への関与については、反ユダヤ主義との関連で激しい議論があり、この議論は、エリアーデの政治性とナショナリズムの評価の難しさを物語っていると思われる）。
- エリアーデは、自ら編集したイオネスクの論文集『風配図（Wind Rose）』の編者後記において、「若い世代の「経験」、「冒険」、「正教」、「本来性（authenticity）」および「生きられた経験（lived experience）」の考えは、イオネスク教授の思想にその源がある」と述べている [IONESCU 1937]。
- 14) エリアーデの弟子と言われた宗教学者 I. P. クリアーヌは、エリアーデは、その論文「認識の手段としてのフォークロア」において、イタリアの歴史学者ベネデット・クローチェらによって代表される「歴史主義」を批判する立場を提起し、「歴史主義」は「伝統的社会」に表れる異常な現象に関する明らかな証拠を否定していると論じていると指摘し、『永遠回帰の神話』（1949）以前の早い時期において反歴史主義的な認識を持っていたことを示唆している [CULIANU 2000]。
- また、エリアーデ研究者ツルカヌは、エリアーデの反歴史主義の形成には、A. クマーラスワーミ、J. エヴォラ及び R. ゲノンらの「伝統主義者」および哲学者ブラガの影響が寄与していると指摘し、ブラガが、哲学者 O. シュペングラーおよび民族学者 L. フロベニウスから着想を得た「文化の哲学」に基づき、ルーマニア文化の起源と様式（style）論により、30年代のルーマニア知識人のアイデンティティー論争の決着に貢献したと論じている [TURCANU 2010]。なお、エリアーデのルーマニア時代の伝記を著した研究者 M. L. リケッツによれば、エリアーデは、1930年代の後に、「伝統主義者」のエヴォラ及びゲノンが、近代の文化に対し、過度に否定的態度を取っていることを批判した [RICKETTS 1988]。

---

## 参考文献

---

(参照した文献の版が初版と違う場合、訳書がある場合は括弧内に記す)

ALECSANDRI, Vasile

1966 Poezii populare ale românilor, Editura pentru literatură.

1978 Opere III, Poezii populare, Editura Academiei R.S.R.

AL-GEORGE, Sergiu

2002 Arhaic și Universal, India în conștiința culturală românească, Ediutra Herald.

ALLEN, Douglas and DOEING, Dennis

1980 Mircea Eliade, An Annotated Bibliography. Garland Publishing, INC.

荒木美智雄

2001 『宗教の創造力』講談社。

BÎRLEA, Ovidiu

1974 Istoria folcloristicii românești. Editura enciclopedică română.

BLAGA, Lucian

1944 (2011) Trilogia culturii. Fundația Regală pentru Literatură și Artă.

BRĂILOIU, Constantin

1984 Problems of Ethnomusicology. Cambridge University Press.

CĂLINESCU, Matei

2001 The 1927 Generation in Romania: Friendships and Ideological Choices [Mihail Sebastian, Mircea Eliade, Nae Ionescu, Eugène Ionesco, E. M. Cioran]. In East European Politics and Societies, Vol. 15 No. 3.

CARACOSTEA, Dumitru

1942 (1992) Material sud-est european și formă românească. In Dreptul la memorie în lectura lui Iordan Chimet I, Editura Dacia.

CORNIS-POPE, Marcel and NEUBAUER, John

2004 History of the Literary Cultures of East-Central Europe, Junctures and disjunctures in the 19th and 20th centuries, Volume III. John Benjamins Publishing Co.

CULIANU, Ioan Petru

1995 Mircea Eliade. Editura Nemira.

2000 Studii românești I, Fantasmеle nihilismului, Secretul doctorului Eliade. Editura Nemira.

DUNDES, Alan

1996 The Walled-Up Wife: A Casebook. The University of Wisconsin Press.

DATCU, Iordan and STROESCU, S.C.

1979 Dicționarul folcloriștilor. Editura științifică și enciclopedică.

DÉGH, Linda

1965 Folktales of Hungary, Routledge & Kegan Paul Ltd.

出口米吉

1908 (1980) 「我國に於ける石崇拜の痕跡」『東京人類学会雑誌』第二四卷二七一号

EDER, Matthias

1958 Schamanismus in Japan. In Paideuma, VI, 7.

ELIADE, Mircea

1934 India, Editura Cugetarea.

1937 (1993) Folclorul ca instrument de cunoaștere. In Insula lui Euthanasius. Humanitas.

1938 (2000) Cultul mătregunei în România. In Zalmoxis: Revistă de studii religioase, Volumele I-III (1938-1942). Polirom.

1939 (2000) Cărțile populare în literatura românească. In Zalmoxis: Revistă de studii religioase, Volumele I-III (1938-1942). Polirom.

1940-1942 (2000) Mătreguna și miturile "nașterii miraculoase". In Zalmoxis: Revistă de studii religioase, Volumele I-III (1938-1942). Polirom.

1943 (2004) Comentarii la Legenda Mașterului Manole. Humanitas.

1958 (1968) Patterns in Comparative Religion. Sheed and Ward Ltd. (『大地・農耕・女性—比較宗教類型論—』堀一郎訳: 未來社)



- 1961 Recent Works on Shamanism: A Review Article. In *History of Religions*, Vol. 1, No. 1.
- 1963a (1986) *Myth and Reality*. George Allen and Unwin Ltd. (『神話と現実』エリアーデ著作集第七巻、中村恭子訳：未来社)
- 1964 (2004) *Shamanism, Archaic Techniques of Ecstasy*. Princeton University Press. (『シャーマニズム 古代的エクスタシー技術』上下巻、堀一郎訳：筑摩書房)
- 1972 (1976, 1977) *Zalmoxis, The Vanishing God, Comparative Studies in the Religions and Folklore of Dacia and Eastern Europe*. The University of Chicago Press. (『ザルモクシスからジンギスカンへ：ルーマニア民間信仰史の比較宗教学的的研究』全二巻、エリアーデ著作集第十一巻および第十二巻、斎藤正二等訳：せりか書房)
- 1977 *No Souvenirs, Journal, 1957-1969*. Harper & Row, Publishers, Inc.
- 1981 *Autobiography, Volume I, 1907-1937, Journey East, Journey West*. Harper & Row, Publishers, Inc.
- 1982 (2009) *Ordeal by Labyrinth, Conversations with Claude-Henri Rocquet*. The University of Chicago Press. (『エリアーデ自身を語る 迷宮の試練』住谷春也訳：作品社)
- 1984 (1987) 『エリアーデ日記 (上)』石井忠厚訳：未来社。
- 1986 『エリアーデ日記 (下)』石井忠厚訳：未来社。
- 1988 *Autobiography, Volume II: 1937-1960, Exile's Odyssey*. The University of Chicago Press.
- 1989a (1963b) *The Myth of the Eternal Return, Cosmos and History*. Penguin Books Ltd. (『永遠回帰の神話 一祖型と反復一』堀一郎訳：未来社)
- 1989b 『エリアーデ回想 (上)』石井忠厚訳：未来社。
- 1990 『エリアーデ回想 (下)』石井忠厚訳：未来社。
- 1992 *Meșterul Manole, Studii de etnologie și mitologie*. Editura Junimea.
- 1993 *Jurnal, Volumele I-II*. Humanitas.
- 1994 *Fragmentarium*. Humanitas.
- 1996 *Lucrurile de taină*. Editura Eminescu.
- 1999 *Europa, Asia, America: Corespondență, vol. I: A-H*. Humanitas.
- 2004a *Europa, Asia, America: Corespondență, vol. II: I-P*. Humanitas.
- 2004b *Europa, Asia, America: Corespondență, vol. III: R-Z*. Humanitas.
- 2007 *Jurnalul portughez și alte scrieri. 1, 2*. Humanitas.
- 2010 *The Portugal Journal*. State University of New York Press.
- FOCHI, Adrian
- 1964 *Miorița, Tipologie, Circulație, Geneză, Texte*. Editura Academiei R. S. R.
- 1985 *Cintecul epic tradițional al românilor*. Editura științifică și enciclopedică.
- 1987 *Valori ale culturii populare românești I*. Editura Minerva.
- 藤嶋亮
- 2012 『国王カール対大天使ミカエル軍団—ルーマニアの政治宗教と政治暴力』彩流社。
- HAGUENAUER, M. C.
- 1956 *Origines de la civilisation japonaise, Introduction à l'étude de la préhistoire du Japon. vol. I. Libr. C. Klincksiek.*
- HANDOCA, Mircea
- 1980 *Mircea Eliade, Contribuții biobibliografice. Societatea literară "Relief românesc"*.
- 1997 *Mircea Eliade 1907-1986, Biobibliografie*. Editura "Jurnalul literar".
- 1998 *Mircea Eliade, Biobibliografie Vol. 2, Receptarea critică 1925-1986*. Editura "Jurnalul literar".
- 1999 *Mircea Eliade, Biobibliografie Vol. 3, Receptarea critică 1986-1999*. Editura "Jurnalul literar".
- 2002 *Viața lui Mircea Eliade*. Editura Dacia.
- HASDEU, B. P.
- 1974 *Etymologicum Magnum Romaniae, II*. Editura Minerva.
- HITCHINS, Keith
- 1994 *Rumania 1866-1947*. Claredon Press.
- HORI, Ichiro
- 1964 *Penetration of Shamanic Elements into the History of Japanese Folk Religion, In Festschrift für AD. E. Jensen, Teil I.*
- 堀一郎
- 1953-1955 『我が国民間信仰史の研究』全二巻、創元社。

- 1982 『シャマニズムその他』堀一郎著作集第八巻、未來社。  
 1993 『聖と俗の葛藤』平凡社。
- IONESCU, Nae  
 1937 (1990) *Roza vînturilor*, Editura "Roza vînturilor".  
 ケイヴ、デイヴィッド  
 1996 『エリアーデ宗教学の世界—新しいヒューマニズムへの希望』吉永進一、奥山倫明訳：せりか書房。
- KITAGAWA, Joseph M. and LONG, Charles H.  
 1969 *Myths and Symbols, Studies in honor of Mircea Eliade*. The University of Chicago Press.  
 栗原成郎  
 1975 「スカダル城邑建設考—セルボ・クロアト民衆叙事詩における人柱の歌—」『ロシア・西欧・日本』朝日出版社。
- LAUFER, Berthold  
 1917 *La Mandragore*. In 通報 T'oung pao, XVIII.
- MATSUMOTO, Nobuhiro  
 1928 *Essai sur la mythologie japonaise*. Libr. orientaliste Paul Geuthner.
- MINAKATA, Kumagusu  
 1895 *The Mandrake*. In *Nature*. No. 1330, Vol. 51, April 25, 1895.  
 1896 *The Mandrake*. In *Nature*. No. 1398, Vol. 54, August 13, 1896.  
 1898 *The Mandrake*. In *Nature*. No. 1479, Vol. 57, March 3, 1898.
- 南方熊楠  
 1926 「人柱の話」『続南方隋筆』岡書院。  
 1931 (1972) 「樟柳神とは何ぞ」『南方熊楠全集』第四巻、平凡社。  
 2005 『南方熊楠英文論考 [ネイチャー] 誌篇』集英社。
- 中山太郎  
 1930 (1969) 『日本巫女史』八木書店。
- NUMAZAWA, Franz Kiichi  
 1946 *Die Weltanfänge in der japanischen Mythologie*. Verlag Josef Stocker.
- OIȘTEANU, Andrei  
 1999 *Cosmos vs. Chaos, Myth and Magic in Romanian traditional culture*. The Romanian Cultural Foundation Publishing House.  
 2011 *Narcotice în cultura română, Istorie, religie și literatură*. Polirom.
- OKA, Masao  
 1933 (2012) *Kulturschichten in Alt-Japan, Band I-II*. Bier'sche Verlagsanstalt.
- 岡正雄  
 1979 『異人その他—日本民族 = 文化の源流と日本国家の形成』言叢社。
- 奥山史亮  
 2012 『エリアーデの思想と亡命—クリアースとの関係において』北海道大学出版会。
- 奥山倫明  
 2000 『エリアーデ宗教学の展開—比較・歴史・解釈—』刀水書房。
- ORTUTAY, Gyula  
 1972 *Hungarian Folklore, Essays*. Akadémiai Kiadó.
- PETTAZZONI, Raffaele  
 1929 *La mitologia giapponese secondo il I libro del Kojiki*. N. Zanichelli.
- RICKETTS, Mac Linscott  
 1988 *Mircea Eliade, The Romanian Roots, 1907-1947*. Vol. 1, Vol. 2. Columbia University Press.
- 佐藤慎太郎  
 2011 「エリアーデ宗教学形成期におけるナエ・イヨネスクの影響」『宗教研究』84巻4輯
- SCURTU, Ioan and BUZATU, Gheorghe  
 1999 *Istoria românilor în secolul XX (1918-1948)*. Editura Paideia.
- 新免光比呂  
 2006 「ルーマニアにおけるファシズム運動と知識人—レジオナル運動とフォークロア研究からみた1930年代」『宗教とモダニティ』世界思想社。  
 2010 「ナエ・ヨネスクとミルチャ・エリアーデ—1930年代のルーマニア知識人サークルとレジオナル運動」

『宗教とファシズム』水声社。

SLAWIK, Alexander

- 1936 (1984) Kultische Geheimbünde der Japaner und Germanen. In Wiener Beiträge zur Kulturgeschichte und Linguistik, Vol. 4. (『日本文化の古層』第二章、住谷一彦、クライナー・ヨーゼフ訳：未来社)

SPINETO, Natale

- 2009 Mircea Eliade, Istoric al religiilor, Cu o corespondență inedită Mircea Eliade-Károly Kerényi. Curtea Veche Publishing.

STARR, Frederick

- 1901 Notes upon the Mandrake. In The American Antiquarian and Oriental Journal, Volume XXXIII, January-November, 1901.

住谷春也

- 2008 『バラード BALADA 口承物語詩』未知谷。

ȚURCANU, Florin

- 2007 (2003) Mircea Eliade, Prizonierul Istoriei. Humanitas.  
2010 Southeast Europe and the Idea of the History of Religions in Mircea Eliade. In Hermeneutics, Politics, and the History of Religions: The Contested Legacies of Joachim Wach and Mircea Eliade. Oxford University Press.

VANHAELEMEERSCH, Philip

- 2006 A generation "without beliefs" and the idea of experience in Romania (1927-1934). Columbia University Press.

VARGYAS, Lajos

- 1967 Researches into the Mediaeval History of Folk Ballad. Akadémiai Kiadó.  
1983 Hungarian Ballads and the European Ballad Tradition, Vols. I-II. Akadémiai Kiadó.

柳川啓一

- 1973 「誰が一周おくれのランナーか」『悪魔と両性具有』エリアーデ著作集第六巻月報、せりか書房。